

顛訣耕雲註種月擽撫藁における復古

——功勲五位を中心として——

石 附 勝 竜

一 はじめに

1 擽撫藁の異本並題名について

2 擽撫藁の偏正・功勲両五位に対する従来の評価と問題点

二 擽撫藁の功勲五位解釈(大慧眼蔵・古轍・傍提・擽撫藁の功勲五位解釈の比較)

1 向(面授—a師よりの働きかけ)

2 奉(面授—b弟子における実践)

3 功(回互・不回互)

4 共功(事々無礙と傍提)

5 功功(究極的傍提)

6 功勲五位と向上事

三 曹洞禅の功勲五位史における擽撫藁の位置

1 日本曹洞禅において(峨山・大智・黙隠・古轍の註釈者達・指月各禅師における功勲五位観との比較)

2 中国曹洞禅における淵源について(洞山・曹山・石霜)

四 おわりに(江戸期における宗乗の自覚と傑堂・南英両禅師の宗乗の自覚における正法眼蔵の比重ならびに今後の課題)

一 はじめに

1 擽撫藁の異本並題名について

顛訣耕雲註種月擽撫藁とは、越後の耕雲寺に住した傑堂能勝禅師(一三五—一四二三)が、所伝の後曹山了悟大師慧霞述の五位顛訣に註釈を加えて宗旨を発揚したことばを、その法を嗣ぎ同じく越後の種月寺に住した南英謙宗禅師(一三八六—一四六〇)が擽撫(拾い取る)した藁(稿)という題の意味の三巻の冊子本であり、文安四年(一四四七)に完成されたものである。

この擽撫藁については竹内道雄先生が『宗学研究』第九号「南英謙宗の研究」で触れられている如く三種の異本がある。一本は上巻のみしか現存していないが、南英謙宗禅師の御真述本として、重要文化財に指定されており、一本は三巻完備で元文四年(一七三九)磐梁筆とされている写本であり、共

に顕訣耕雲註種月擽撫藁と題がつけられている。以上二本は現在種月寺に月舟宗胡禅師寄贈の金泥書の漆塗の箱に入れて秘蔵されているものである。他の一本は正徳四年（一七二四）の序によれば、武州金峯山永林禅寺寂然慧空なる和尚が三十年前に謄写していたのを永林寺蔵版で享保元年（一七一六）に出版されたもので曹洞宗全書注解五に転載されておりこれは顕訣耕雲評註種月擽撫藁と題され評の字が多い。

この三本即ち上巻は三本、中・下巻は後二本のみを比較してみると、一番大きな差は自筆本の最初にある種月謙宗の序が磐梁本にはなく、慧空本には上巻と中巻との間に不完全な形で挿入されている程のもので、他は真字略字、異字、脱落、写誤、又は後世の灯史書による補足の有無等の若干の差はあるが、思想に関する所では差は殆んどない。

よって、一番確かかと思われる自筆本が上巻しかないから必ずしも明確にはいえぬが、右の結果から全書本と自筆本との思想の差はないとみてよいのではないかと思う。因みに功勲五位の載っているのは中巻である。

所でこの題について少し問題がある。第一に「顕訣」を以て慧霞述の五位顕訣を意味せしめているが、五位顕訣とは元来中国曹洞宗の高祖と仰がれる洞山悟本大師良价（八〇七—八六九）が、偏正五位について示された百五十一字の簡単な説明文である。よって南英のいう慧霞述五位顕訣とは、詳し

くは「洞山五位顕訣并先曹山揀出語要」であり、洞山の五位顕訣と、それに洞山の弟子として洞山とならんで中国曹洞宗の祖師である曹山元証大師本寂（八四〇—九〇一）の揀出せる語をその弟子たる慧霞が編纂したものと思われる。即ち洞山の五位顕訣並びに曹山本寂の揀語を総称して五位顕訣といったものである。又功勲五位は右書の中にはないから、右書以外の洞山曹山の語をも五位顕訣で意味していることになる。

第二に種月寺蔵本では二本共顕訣耕雲註種月擽撫藁とあるに對して、永林寺版は顕訣耕雲評註種月擽撫藁と評の一字が多い。この上から種月寺蔵本は顕訣への敬虔な奉重の態度があるのを、永林寺版は先仏を批評するという意味をこめたものとして加筆されたもので、内容も変化せしめられているのではないかとの疑問も起るかも知れぬが、評といっても現在用いるような批評という意味ではなく、昔時では碧巖録や従容録の評唱にみられるような、唱和・講義という意味にも考えられ、結局何よりも、内容が殆んど異ならぬ上からすると、精々後世で語数を揃えるために付した程のもので、改竄という意図はなかったといつてよいのではないかと思う。

2 擽撫藁の偏正・功勲両五位への従来の評価と
問題点

日本曹洞宗においては、高祖道元禅師の寂後、まもなく起った戦乱にまぎれて、高祖の『正法眼蔵』も散逸し、写本と

して残されても殆んど死蔵されるのみとなり、その結果高祖が烈しく批判された中国臨濟禪と混同し、あるいは土俗信仰と結合して高祖禪の純粹性が忘れられていった。^①

しかしその中でも、高祖が如浄禪師から伝来したといわれる宝鏡三昧・五位頭訣は別に重んぜられ、就中、それ等の骨子を説いたといわれる五位が重要な機関として、重んぜられ後世に影響を与えたといわれている。^②がこの五位唱道は現われた時から、後述の如くもはや宗乗性は薄らぎ済門的見性尊重、正位重視へ傾いていたものである。

その間において傑堂・南英のこの擽撫藁が、洞山・曹山の著としての五位頭訣の本義を復古していたという点で殆んど唯一ともいえる程高く評価されているのは衆知の事実である。そして江戸時代で太平と文運の復興により、宗義が復古されるようになっては、この擽撫藁に基く五位宗義の復古が重要な役割をなしているのが知られている。その影響は梅峯・黙隠を始め宗乗復古に関係した天桂・面山・指月・本光・万仞・洞水等の各和尚に及び、甚大なものがある。

これ程重要な地位を占めているにも拘らず、その賞讃の内容をみると、誠に通り一返のものに過ぎぬのは奇怪といわねばならない。即ち偏正五位において、頭訣に基き従来済門系で誤解されてきた第四位の兼中至を改めて偏中至とし、又従来第三位の正中来を中心として段階的にみる様に誤解されて

きたのに対し、第五位の兼中到を中心として回互不回互して無段階の理事俱備円成なる宗乗性を発輝したというに過ぎない。

これのみならば、誤解者が修行中心に偏正をみているのに対し擽撫藁は本証面の解明に理論的整合性を打出したに過ぎぬ、即ち両者の差は立場の差で宗乗の差ではない、といわれてもしかたがないこととなる。事実済門系の方で偏正は頭訣的に兼中到中心でみ、功勳は典型的な済門的見性重視で受取っている人もある。これについて擽撫藁には功勳五位において、修の面の宗旨に重点をおいて相当のスペースをさいているのに、この復古については曾て一度も触れられたことがなかったのは、誠に意外である。

しかし思えばこの功勳に関して宗乗性を表面にたてていないのは長い伝統であったのであり、中国では勿論、日本でも偏正において曹洞宗旨の復古を強調される祖師方が、功勳に關すると唯単に「他家^ハ単^ニ貴^ニ見^ニ地^ニ明白^ニ。我宗兼要^ハ親到^ニ一回^ニ。」^③という石霜禪師の語を以て方便的休歇強調と受取って曹洞宗旨としたのみであり、結局見性中心の段階禪である済門系と異なる点はのべられていない。

現今僅かながら存在する功勳五位の解釈をふりかえってみても、この点には殆んど留意せず、曹洞五位の大成者なる月湛洞水和尚（一七二二—一八〇三）の説にはよらず、それよ

りも功勳五位については曹洞的特質の未開拓な指月和尚（一七六四）の五位説に主としてよっている等、甚だ無配慮的な点が存するようである。

加うるに、實質上、功勳五位の内容の説明における宗乗性の宣揚に関しては、江戸期で洞水和尚に比肩する者がないとされるが、この洞水和尚が耕雲種月の説により大成すと自らもいい、一般にも信じられているにも拘らず、實際は攘撫藁の徹底に対すると未だしの感もあるようである。

洞水和尚の説が宗乗的に素晴らしいが尚多少解せぬ点もあることは『印度学仏教学研究』33号の拙論「功勳五位傍提における功勳五位の曹洞禅的特質」において論じておいたが、これを攘撫藁にかえて考えることは歴史的理解を深めるに役立つのみならず、現今見失なわれ問題となりがちな修の面の宗旨の解明に重要な一踏石をそえることになると思われる。

これをなすにあたり、攘撫藁は非常な独自性を帯びているので、まず済門の解釈と洞水禅師の『功勳五位傍提』における解釈を比較して理解の階段を設け、次に攘撫藁の解釈と比較してゆきたい。

ついでには臨済系の資料としては、宋代臨済の暁将、大慧宋杲の三卷『正法眼蔵』と、明代末期の曹洞宗ではあるが臨済宗義との混淆を来たした永覚元賢の『洞上古轍』が一番詳細で立場が明確であるので、これを用いたい。

(1) 室町期より江戸時代まで宗義上の著作は僅なのに対して宗門の室中に伝えられたおびただしい咒術の切紙がこれを証明しよう。『曹全書』室中参照

(2) 日本曹洞宗で宗旨拈提に五位が用いられたのは峨山禅師からである。当時としては宗旨拈提には明峰禅師の仮名法語、峨山禅師の甘露白法等坐禅唱揚によるものもあり、又戒法としては疑わしいながら梅山聞本禅師の戒法論等があるが、それ等は小部であり、むしろ峨山禅師の山雲海月、峨山下では通玄禅師の通玄録、実峯良秀禅師の語録等、又明峰下では大智禅師の「天童小参抄大智禅師解註恵明上座点破」等五位思想を用いての拈提が甚だ多い。しかしそれ等が皆偏正では兼中至を用いているのは、傑堂・南英の両師により訂され、江戸期の復古にも再訂正されているが、尚独菴・月舟・円山等に用いられているのを見ると、その冥々裡に伝えられた影響力を知ることができる。

(3) 功勳五位についての従来の誤解の原因としては次の四点があげられると思う。一、曹洞二師の一師で五位思想の宣揚者たる曹山大師に功勳五位の説なく、曹山と同参の石門慧徹がそれを伝えてはいるが、誠に簡単なものに過ぎず、その後の祖師の語録でも中国では殆んど取上げられなかった。二、偏正五位は師家分上の事として自内証の法門的性格なのに対し、功勳五位は学人進修の階梯で対他の方便という第二次的なものともみられ軽視されたこと、三、五位思想に於て他宗義と比較して曹洞宗旨を表わさんとする場合、済宗では偏正五位を曹洞宗旨とは極端に對蹠的な見性中心段階重視の立場で受取っているから、偏正五位で比較するのが最も簡単に明確に思われた結果、偏正五

位の宗旨のみが独特の宗旨と思われ、功勳五位における宗旨主張は軽視されてきた。四、他宗で偏正五位が功勳的に解され、功勳五位自身の意義が軽視されてくると、宗門でもその影響をうけ、且つ誤まれる本証強調の悪風と高祖の五位説批判の誤解から、偏正はともあれ、功勳五位は済門と同じ見方で考え、功勳五位は漸階的、体用差別的、見性重視的なのが当然だとの見方が大勢を占めるようになった。即ちこれらに拍車をかけたのが明治以降の和辻・田辺・秋山・橋田等の各氏による道元禪の哲学的理論的把握であり、高祖の本証面の強調のみを特質として受取った結果、不可得の仏法中においては心理的段階的な功勳は本来の姿ではないと、名目の上からも功勳五位は殆んど顧みられず、洞山の三路・三滲漏等の実践修行の用心の面すら忘れられ、果ては全一の仏法中に区別あるべきなしとして、偏正五位迄異端視する現今の風潮に至っては、功勳五位への軽視、誤解は極まったといつてよいであろう。事実明治以降では、秋野孝道老師『五位説講話』、保坂玉泉博士『參同契宝鏡三昧洞上五位説現代講話』、安谷白雲老師『五位、三帰、十重禁戒独語』等で偏正五位の曹洞的特色は説かれているが、功勳五位における曹洞的特質は全くふれられていず、内容も済門的解釈に同じか、近いかであり、更に他の多くの五位説講話では偏正五位のみで功勳五位は全く無視されている。

二 擽撫藁の功勳五位解釈(大慧眼蔵・古

轍・傍提・擽撫藁の功勳五位解釈の比較)

さて四者の各解釈の比較であるが、洞山の説明には洞山と僧の問答の形で伝えられたものと、洞山の頌とがある。所で済門の大慧と永覚には問答についての釈註しかなく、擽撫藁には頌についての釈註しかなく、兩者についての釈註のあるのは五位傍提のみである。しかし一方についてのものしかないのも他方を予想している所があるので、その解釈を以て各位全体の釈としたものと扱ってよいと思われる。

そこで比較に当って語句の対照の便と、始めに洞水の曹洞的特質の把握を知つて擽撫藁と比較せんがため、まず問答の解釈において大慧・古轍と五位傍提とを比較し、次に頌において五位傍提と擽撫藁とを比較したい。

1 向(面授—a 師よりの働きかけ)

僧問。如何是向。師曰。喫飯時作麼生。又曰。得力須忘飽。休糧更不餓。

大慧眼蔵

洞上古轍

五位傍提

向謂趣向此事。喫飯時作麼生。謂此事不可下喫飯時無二功勳而有中間断上也。

向謂趣向然必先選仏場中。心空乃及知有若不先知弟。切磋琢磨。纔有有。向箇甚麼。喫飯放過。簪纓落魄。宗時作麼生者。謂日用祖為之断。厓過梯也動静之間。不可須……是乃要俾初叟忘卻也。得力須知有者。退步就忘飽。言向之。已親到一回。若人長

專則不暇計餓飽也。

時退歩。乳中酪分明是也。是故凝情趣向。守一無適。……寢食俱忘。每時返照。奈風雲未合何。然而得レ力之勢。不階下物。必獨一步丹霄耳。

この問答でのみみると三者共、有ることを知り、それに向つて寢食をも忘れて努力せねばならぬこととみてゐるのは同様である。只五位傍提が前者と異なるのは、前二者が有ることを求めらるべきものとして迷悟相對の上でとらえてゐるのに対して己に就いて、親到一回せしめんためのものでしたり、得力の勢が階下即ち迷の分際のもではなく、自ら君帝・悟の勢が表われてゐるとする所に、大慧・永覚のものより、本来の悟と修の不二的傾向を感ぜしめられるのである。それは頌の解釈において擽撫藁と共にみてゆくと更に明らかとなる。

聖主由来法帝堯。御人以禮。曲意腰。有時鬧市頭辺過。到處文明賀聖朝。

五位傍提

……(寢寐)雖殊乎。帝座則一耳。是以權設階梯於宸塔。將引落魄人乎竜樓。先趣向之功也。語朝堂之事。御人之礼。不踰矩。其所以法者。非礼勿言。非礼勿動。不先王服。不服。不先王事。不御然郷道之学成。日新日新矣。……今日選仏之場。一法。斯礼。向。斯道。則不。鬧市相逢。茅屋挂珠簾。其不遠而已。

擽撫藁

……畢竟向者君德化所。向。百姓不知其德化。而自然樂之。喫茶喫飯。造次顛沛。悉靡不。是德化。如入芝蘭之室者。久而不聞其香。即与之化者乎。

ここで問答の解釈では知有の有が何であるか不明であったが、是でみれば日常先仏に則りつつ、不明の弟子を化導する師であることが分る。これは済門の有の解釈が偏を離れた正位・無の絶言絶慮を意味するのに比せば、甚だ異質的といえよう。ともあれ向を済門系は全く修行者の方からの進向と解しているのに対して、五位傍提では師の方からの垂手とし、それに対する弟子の向もあるとして、師資の啐啄の上から解し、更に単に啐啄があるのみならず結局茅屋即ち迷のけがれた身にも無価の位がやがてそなわることと解している。

これに対して擽撫藁は向を専ら君の徳化の向う所としてお

り、五位傍提と同じ所もあるが、弟子たる百姓はその徳化を知らずして自然に樂しみ化するという所に、その素晴らしい啐啄同時のあり方がみられるわけで、正法眼蔵「面授」の卷の「如来の面目を吾が面目として粉骨碎身百万边」といわれた迦葉尊者と釈尊のあり方を髣髴たらしめるものがある。それと同時に、濟門系や五位傍提では喫飯時作麼生を単にそれに拘らぬという二元的見方でみるが、擲撫藁は喫茶喫飯も皆徳化中のものとして生かされる上から、無區別理事不二的見方をしている。行仏威儀中に喫茶喫飯を第二義として賤視すべきいわれはないし、又それを単に時と受取るようなのも時と存在一如の宗乘らしからぬみ方といえよう。

2奉(面授)も弟子における実践)

僧問。如何是奉。師曰背時作麼生。又曰。只知朱紫貴。辜負本来人。

大慧眼蔵	洞上古轍	五位傍提
奉乃承奉之奉。如下人奉三重長上。先致敬而後承奉。向乃功勳之所立。纔向即有承奉之意。故答。背時作	奉如承奉之奉。向而後奉。如三人奉二事長上。必先歸敬而後承奉。若背則不能合外塵。乃背二本分	學道之士。須知有之後益解。奉重。造次顛沛。滲悚戢翼。惟密密。如何奉侍。僅親來。轉疏。古人曰。以三不親近。始解親

麼生。謂此事無間斷。奉時既爾。而背時亦然。言皆即奉之義。蓋奉背皆功勳也。

七六
近。如其迷己。逐物。迢迢与我疏。還惑。己智。多把捉。光影。下。是只貪。觀朱紫。孤中負。本来人。上。哉。於是擬。向。弥背。不。向。不。背。如何。即是。当头。觸。著。弥天罪。退步。承。當。特。地。新。

大慧は奉の時も背の時も間断なく努力せねばならぬといっている。これに対し古轍は背くことがあつてはならぬ、向一本でなければならぬとする。ここに向背の意義が問題となる。即ち背の事に就ては古轍の如く名利に惑うの意か、又は端的に理に向うことの逆の、単なる日常事の意にとるかで分れ、又向の理に就ては日常時の中でも、日常事に即しての理か、日常事と離してみられた理であるかが考えられる。大慧の背においても認める理がもし日常事と不離の理であれば甚だ洞門的となるのであるが、大慧の眼蔵の偏正五位の扱いでも明らかなく、常に理事動静隔別である上に間断なかれの強調からみて、静中の向に対して動中を背とし、動の日常事上において忘れぬという程の意となる。

これに対して、洞水は名利に走ることの奉に非ざるは勿論のこと、向わんとする跡を残すこと自体が、背くことだとし退け、結局退歩承当を強調している。この向背の跡をのこさぬ所は、所謂の絶言絶慮の所を求める否定ではなくて特地新の真相をさすのであり、ここに理事身心を隔別にはみず、そのまま不二の真相に契当せんとするあり方がうかがわれよう。

浄洗濃粧為阿誰。子規声裏勸人帰。百花落尽啼無尽。更向乱峯深处啼。

五位 傍提

擻 撫 藁

奉重之至。惟精惟一。滋親他去。子順父臣奉君。浄洗濃粧刮垢磨光。克己不染汚。事上長智。是以仙陀奉水奉塩。……是乃推翁向裏頭之時。雖与父無異体。此位人牛未亡。无是下与三方法一侶上時。百花落尽藤枯樹倒。雖然猶隱々地。不納僧安身。……功路之長。漸入漸深。……假令到青天無雲。更有向上

月云。浄洗濃粧者。浄身治容等之事也。是為阿誰。不取斥言。師云。百花落尽。啼無尽。舍事入理。更向乱峯深处啼。子還就父。父全不顧。月云。……勸人帰者。不如帰之一声。咸餒其子。礼二奉至尊。子還就父言還。知是逃逝弱喪之蕩子也。夫奉父有孝者。奉君亦有忠。有忠有孝者。於其背

事。

時亦猶如向時。向背共倦々勤勤。則其功必立矣。

右によれば洞水が奉を事々に智を長ずとするは、大慧の背時事上にも理に向って間断勿れというより、君臣父子冥合の臣子の立場の孝順を智とするものであり、父子冥合同体の上にならつつ、体用の跡を拭いきれぬのをいう。故に体用同時の主體的なものである。そして方法と侶ならざる時、青天雲なき時でも、それで終りではなく、更に向上の事があるから、それにおいて奉に努めねばならぬとする。ではこの向上事に対する奉は如何というそれは次の功・共功位でやがて明らかとなる如く大慧や古轍の理中心ではなく、理事不二で示されるものである。

これについて擻撫藁は事を捨てて理に入るとしているのは、理事相對のようであるが、子還就父父全不顧で、子の孝順で理・師の本来面目を説尽している処に、単なる理を越えた性格が知れるが、これをさらに有孝有忠者は向背においても倦々勤勤だと述べるところに、その修行の向の説明の内容と相俟って、師資の間中心であることが再確認されると共に、常に師面目を守る資の孝順による修の重大性が知れるのである。そこに体用隔別とか超向背の絶言絶慮とかを求めるとは異なる宗旨の傍提的性格の発揚があることをしらね

ばならない。

3功(回互不回互)

僧問如何是功。師曰。放下鏹頭一時作麼生。又曰。撒手端然坐。白雲深処閑。

大慧眼藏	洞上古轍	五位傍提
功即用也。放下鏹頭一時作麼生。把鏹頭二言用放下。鏹頭二言用放下。師之意謂用与無用一皆功勳上也。	……把鏹頭是有。向奉。放下鏹頭。是不向奉。由前向奉之功。至此頓忘。……撒手端然坐。白雲深処閑者。謂契入正位也。	……可謂放下鏹頭。端的。歸家穩坐。称一分主。……仏曰。精明湛不揺処。如淨瑠璃含三日月。唯見覺体以爲恒常。猶屬識邊際。……吾祖以似鏡長明。斥之爲真常流注。假令坐著白雲。宗不妙功未成。成三昧。

大慧は用も無用に到らねばならぬが、その用も無用も功勳なるを免れない、と究極の向上を強調しているが、永覚は更に前の向奉の功をここに徹底させ無用に到らしめ正位に契入することと明確化している。所がこれについて洞水は正位契入、帰家穩坐としているが、それは一分の主に称うのみとい

つてゐる。其は覺体にかえる所であるが、只覺体のみて恒常不変と思ひそれに安住すれば未だ識の分際であり、それに昵んではいけないといい、所謂の正位契入のみの非真實性をのべてゐる。これが宗旨の理事不二からでてくることはいふまでもあるまい。

枯木花開劫外春。倒騎三玉象。趁麒麟。而今高隱千峯外。月皎風清好日辰。

五位傍提

擽蕪撫

功之所熟名曰大功。尽却今時始得成立。所謂三世事尽裏情忘。始得就体一般。……今日閻中倒趁麒麟。端的不敢迷己。渠正是我。活面現矣。氣宇如王。是謂之枯木花開。到三者裏。渠無三国土。何処逢渠。所以道。而今高隱千峯外。月皎風清好日辰。是則是未勦絶。猶且清風月下守株人。照与照者。影未亡在。……明白。轉身還墮位。更有向上。一窺。

師云……不立尊貴。不落左右。枯木花開劫外春。全不因四時。倒騎三玉象。趁麒麟。騎者向此方。玉象向彼方。會非常往來。被趁麒麟。而今高隱千峯外。況余禽獸乎。月皎風清好日辰。日午打三更。乃非功哉。

月云聖王之世。麒麟出鳳凰。趁……枯木花開劫外春。耕這箇田地。不立尊貴。不落左右。……被趁麒麟。而今高隱千峯外。……一朝

風月可謂日午三更萬古一朝
功已樹立矣。

洞水は体用と分つた中の就体一般とし、世事を尽くして己に迷わざる氣宇王の如き独立底の自己の確認であり、それは又同一色無弁の処としてゐる。だがしかし、これは照と照者即ち体用の対立をこえていぬ、位に墮つるもので差別を超えていぬものとしてゐる。

これに対し攘撫藁は偈の意味をまず不落左右で常識的存在ではないがしかし不立尊貴であり、又就体独立底人という機用中心の見方ではない。即ち枯木花開と倒騎で表わされる回互中心であり、傍提で不回互の高隠ととられた月皎風清好日之辰は三更日午として明暗の回互でとらえてあり、結局それは回互不回互を具してあり、傍提の如く一面的の故に超えられなければならぬ段階の上の一点なるものでないことは明らかである。

これを古人の偏正五位の正中來の把握のし方にみると、濟門は自利の上の見性として、利他の働きへの前段階的なものとしており、五位傍提もそれに近いのが知れるのであるが、曹山揀では「此一位答家須向偏位中。明其体物。不如下入正位。明也。」「如藥山云。我有二一。句子。未會向人說。道吾云。相隨來。」と云って、正位の独立が濟門的な単なる理の

独立ではなく理事の回互においてあるものであることを強調している所からみると、攘撫の見方は五位傍提よりもより宗乘的な綿密性があるといえよう。

4 共功（事々無礙と傍提）

僧問。如何是共功。師曰。不_レ得_レ色。又曰。素粉難_レ沈_レ跡。長安不_レ久居。

大慧眼藏	洞上古轍	五位傍提
共功謂 _二 法与 _レ 境敵 _一 。……不 _レ 得 _レ 色乃 _レ 法与 _レ 境不 _レ 得 _レ 成 _二 一 _一 。正用時は顯 _二 無用底 _一 。無用即用也。若 _二 作 _一 一色 _一 是 _二 十成 _一 死語。	共功者。諸法竝興。故曰共。洞山云。不 _レ 得 _レ 色者。乃 _レ 為 _二 前位 _一 是一色。諸法俱隱。今位一色消尽。諸法俱現。	前位大功初成。即玉闕未 _レ 透 _レ 處。大功纔 _レ 轉。借 _レ 為 _二 誕生 _一 意。如何。脱 _二 身一色 _一 無 _二 遺影 _一 ……此位照与 _二 照者 _一 。二俱寂滅。……不 _レ 与 _二 向 _一 之 _二 大功 _一 同 _上 。所以道 _二 不得 _レ 色 _一 ……那地風光於 _レ 是 _二 乎現 _一 。信 _レ 道山自 _レ 高 _レ 分 _レ 水 _レ 自 _レ 深。

大慧は前位の無対立無用の一色に留まってはならぬ、須らくそれから出て、それを生かして法境能所相對の用を發揚せねばならぬとする。古轍も前位の正位無からの展開とみてい

るのは大慧と同じようであるが、大慧が能所相対でみているのは機用を重んずる済宗らしく、これを諸法で捉えている古轍には些か洞宗的な形跡があるともいえようか。

傍提も、同一色無弁の処を過ぎて後、山自高水自深の自然法爾の現前だとしているのは、古轍に似ている。それと同時に能所を此位で始めて減ずとしているのは、済門が功位で正位の獲得をのべるのに対して偏位の所に始めて真の正位一色をみるべしとする洞曹の傍提的性格をよく示している。

衆生諸仏不相侵。山自高兮水自深。万別千差明底事。鷓鴣啼処百花新。

五位傍提

前位功極放三下鑽頭。……雖是一色乾坤。猶且喫棒。何故争奈山高水闊。何……到三乎一色過後者。本分活法現成。……恁麼也得。不恁麼也得。帝網重々交羅無尽。……倘其玄学於是點頭。不出不入乎華藏法界。……昔者歐陽公終日尿尿那裏。蹉過多時也。及得二夫薦福禪。

擲撫藁

師云。共皆也。衆生諸仏不相侵。山自高兮水自深。然万別千差皆功也。……已是共功。為甚麼不を得。諸法各住自位。不于我事。月云鷓鴣啼処百花新者。明底事皆功也。可謂不得色不于我事。若夫色見声求皆行邪道。

師指揮。而優游放曠乎帝網重々之郷矣。惜哉。所以道。万別千差明底事。鷓鴣啼処百花新。是不惟事々無礙而已。亦惟被渠礙也。久矣。……誕生王子須有父。……信道子若哮吼。祖父俱尽。直得王子灌頂後。能成一國之事。訖。

ここでも傍提は問答の所の如く、一色をこえて後の万法が自位に住することをのべて段階性をだしているが、更に事々無礙だといっている。これは済門では考えられぬ所で、済門では次の最後の功功位が自在の活用たる事々無礙だとい、此位は只諸法差別が現われるだけの世界としている。傍提はそれとは異なりこれを更に事々無礙を表わしているだけではなく、此事、那人(理・本来面目)を表わす位としている。これは一寸不思議に思われるかもしれぬ。というのは此事を表わすというのは理事無礙の世界であり、一般には事々無礙の前段階と思われるからである。ここに傍提でそのようにとらぬ所以は何かとみたい。

まず五位宗乘の大前提は傍提であり、事に一切を尽くして

ゆくことである。その時この事とは教学の如く単に理と事が一枚の事だという観念的なものではない。むしろ紅爛底人とか頭長三尺頸短二寸といった、人に賤しめられる程の徹底した事の重視をさすのであり、それからすれば単なる理事一如の事とは、理がそのまま形を借りて表われたという程のむしろ理に重点をおいた仮物にすぎない。即ち事の階級迄は届かない理の平等観一辺の上の事である。大慧が次の功々位で説く如く、此事々無礙にたつて我がたてば汝滅し、汝たてば我滅すというのは論理的には難がないようであるが、それを具体的な禅の接得の上に現わせば、師をも打ち喝し覆えず、或は雪峯の沙米一斉に去るにみられる悪平等的傾向をもたらずものである。

これに対し紅爛底人の如きは、即時即処に於る円成の時、那人を尽くしているが故に却つて高処は高平低処は低平なのであり、修行者としての差別面の我はあく迄も那人に仕えるものとして恭敬の限をつくす、そこに真に那人と一如となり、那人に礙せられ那人を我に円成せしめる道があると思ふ。即ち那人に礙せらるるとは、単なる事々無礙の悪平等観をこえた階級裏の平等において那人・理を尽くしてゆくという、最も具体的な現実的存在の全一的把握における修行をのべているわけである。ここにおいては単なる事々無礙という論理的、或いは機用的華麗さは影を消し、人間存在の具体的

本質的な存在様態に深く根ざしたもののみのありようとなる。ここに棒喝を余り好まぬ、曹洞の綿密にして老成した、真の意味の庶民的ともいわれるあり方がある。

これに対して、擽撫藁の此位の説明には特に傍提のような所謂の事々無礙も超えた那人に礙えらるるといった事辺重視階級重視の認識はないように見える。即ち擽撫藁は色を色見声求といい、此位はそれを超えた所とし、又法住法位で単なる差別見をこえた所のみとしている。しかしこれは向奉の所で事辺重視階級重視は明瞭にでているので、それはもはやいわず前位が明暗回互不回互の相即の所なるに對して、今位は特に事に底事・那人を表わすという性格を強調したものである。

擽撫藁においてはこの五位傍提と同じ傍提的性格があると同時に、これが洞水の場合は前位からの展開で、段階上の単なる一位としての性格が強いのに對して、前位は前位で円成今位は今位で法住法位であつて、これが五位傍提との重要な差異点と思われる。

5 功功(究極的傍提)
 師曰。不共。又曰。混然。無三諱処。此外更何求。

大慧眼蔵	洞上古轍	五位傍提
功功謂ニ法ト境皆	……此功比レ前	此則本有之功。功ニ於

空^{ナラフ}謂^フ無^ク功^ク用^ク大^ク解^ク
 脱^ラ……不^レ共^ク乃^ハ無^ク
 法^キ可^キ共^ス。不^レ共^ク之^ト義^トハ
 如^キ法^キ界^キ事^キ無^レ碍^ク
 是^レ也。爾^ガ前^ニ無^ク我^レ。
 我^ガ前^ニ無^ク爾^レ。所^ニ以^テ
 夾^ク山^ノ道^ヲ。此^ノ間^ニ無^ク老
 僧^ノ。目^ニ前^ニ無^ク闍^ヲ黎^ニ是
 也。

尤^モ深^ク。故^ニ名^ニ功^ト功^ト。洞
 山^ノ云^ク。不^レ共^ク者^ノ……
 ……非^ズ特^ニ法^ノ不^レ可^ク得^ク。
 非^レ法^亦不^レ可^ク得^ク也。
 混^ト然^ト無^ク諱^ム。此
 外^ニ更^ニ何^カ求^ム者^ノ言^フ理^ト事^ト
 混^ト然^ト。並^ニ無^ク藏^ニ隱^ニ
 之^ノ跡^ヲ。乃^チ造^レ道^ノ之^ノ極^ニ
 致^ス。更^ニ有^ク何^カ求^ム哉^{ナリ}。

於^テ修^シ証^ス之^ノ功^ヲ。比^ス前^ニ
 益^シ深^ク。一^切不^レ共^ク……
 固^シ言^フ思^フ不^レ到^ク。不^レ下
 与^ニ二^ノ法^ノ一^ノ侶^ト上^ニ喚^テ作^ス異
 中^ニ異^ト……到^ク二^ノ者^ノ裏^ニ
 如^ク何^カ得^ク不^レ犯^ク而^シ通^ス。
 道^ノ著^ル。則^チ頭^ノ角^ノ生^ズ矣^{ナリ}。
 惟^レ起^ル乎^ニ事^ノ不^レ獲^ク已^ム。
 或^ハ抱^ク座^ニ且^チ作^ス斫^ス勢^ト……
 ……今^日仔^細看^ル来^レ猶^ホ
 轉^ル見^ル舞^ル袖^ノ長^ク。斯^レ位^ノ不^レ
 從^ク今^日一^日去^ク。元^レ是^レ旧
 時^ノ人^{ナリ}。

大慧はその特徴としての法と境という能所強調、賓主互換重視の上から無碍不共を説いている。これに対し古轍が理事の上から非法も不可得として藏隠の跡すらないとしたのは曹洞的徹底といえよう。ただし両者共結局の処無、正位への徹底帰入の如き傾向が見えるのは如何なるわけか。これは偏正五位の解釈にも見えるところで、迷悟相対の上で離言説を強調する済門系の特質であろう。

これに対し五位傍提も言思不到の処とはいっているが、同時に種々の活作用も仔細に見来れば頭角を生ぜしめる以外で

はないとし、それは今日旧事の人以外の何ものでもないことを強調している。ここに五位傍提の実相の事を重んずる性格がうかがわれる。

頭角纒生^ニ已^ニ不堪^ヘ。擬^シ心^ヲ求^ムレ。仏^ノ好^ク羞^ム慚^ム。迢^々空^ノ劫^ニ無^ク人^ノ識^ク。肯^テ向^テ南^ヲ詢^フニ^ハ五^十三^ニ。

五位傍提

擽撫藁

知^ル不^レ到^ク。宜^シ善^ク保^シ護^ス……
 ……纒^ニ形^ニ文^ノ彩^ニ一^ニ早^ク是^レ染^ル汚^ニ。是^レ断^ト
 絶^ト。是^レ以^テ惟^ニ傍^ノ窺^リ有^リ分^ク……
 ……言^フ行^フ虚^ニ位^ヲ全^ク無^ク的^ニ的^ニ。天^ノ
 何^カ言^フ也。四^時行^ハ矣^{ナリ}。箇^々門^ノ
 裏^ニ君^ノ臣^ノ。子^ノ而^シ順^ル父^ノ臣^ノ而^シ奉^ス君^ノ。

師^ノ云^ク。超^ク々^{タル}空^ノ劫^ニ収^ム不^レ得^ク。豈^ニ
 為^ニ塵^ノ機^ノ一^ノ作^ラ中^ニ繫^ス。留^ル上^ニ……不^レ
 共^ト。云^ク功^ノ成^リ名^ノ遂^ゲ身^ノ退^ク天^ノ之^ノ道^ト
 也。……月^ノ云^ク……擬^シ心^ヲ求^ムレ
 仏^ノ好^ク羞^ム慚^ム。直^ニ須^ニ異^ノ類^ノ中^ニ行^フ道^ト
 取^ル異^ノ類^ノ中^ニ事^ト。超^ク然^ト非^レ超^ク然^ト非^レ
 不^レ超^ク然^ト。

これによれば洞水は傍窺を重んじ、天の四時の運行を重んじ、更にその中の君臣・父子の階級を重んじている。これに対し擽撫藁は功成り名遂げて身退く所にこの位があるといっているが、これは何も済門と同じ正位無への後退ではなく、あくまでも異類中行を挙揚しているものである。この位で洞水のような君臣父子の説明がないのは、洞水では第四・第五で漸く傍提的性格が鮮明となってきたのに対し、擽撫藁では始めから強く打ち出しているからであろう。

6 功勳五位と向上事

所で最後に功勳五位自体に対する各祖師の説明をみて、その根本的態度を知りたい。

大 慧	永 覚	洞 水	傑堂・南英
<p>如レ此說皆趣ニ 向承ニ奉於日用 四威儀内ニ成ニ 就世出世間ニ無 レ不ニ周施一ニ謂ニ 之功勳五位ニ也 ……爾道它古 人意果如レ是 乎。若只如レ此 有ニ甚奇特一。只 是口伝心授底 葛藤。既不レ如 是且道古人意 作麼生。</p>	<p>名^{グル}功^ハ者。以^テ視^ル 向上事。則亦 属ニ人力造到一 是亦功也。</p>	<p>横^ヘ身^ヲ為^ス簡事一 欲^レ明^ニ向上事一 ……惟個向上 之事。切忌塗 糊。不^レ見^レ道 乎。道^レ有^ト道^レ無^ト 即得^チ争^ニ奈^レ竜 王按^テ劍^ヲ何^ヲ。</p>	<p>畢竟吾宗門下 事。功勳進修 之位如^シ是。蓋 非^ニ唯^ニ吾宗門下 事一。施^ニ之^ニ乎一 切事。而見^ル其 始^ト与^ト終^ト。總^ニ不^レ 出^レ此五位一者 也。毛韻以^テ勞^ヲ 定^レ國^ノ功^ト。 王功^ヲ曰^ク勳^ト。</p>

一切人力に属するものと賤めている。此に対し洞水は身を横えて旧時人に於てなすことが向上の事であり、さすれば有というも可、無というも可なのであるが、只竜王の按劍の如く傍提に基づくものであることを忘れてはならないとする。擽撫藁はこれを更に明確にいつて一切は五位を出でずとし、功勳とは修業次第であるが王の功を離れぬ所としている所に、偏正・本証と一枚の上からの説なることをしらされ、ここにも擽撫藁の本証妙修性の発露、非段階性の把握がしれるのである。

三 曹洞禅の功勳五位史における擽撫藁の位置

擽撫藁の位置

1 日本曹洞禅において

日本曹洞禅は勿論高祖道元禅師に始まるが、道元禅師御自身は五位には多分に批判的で、永平広録で僅かに偏正の語が見えるのみで、功勳に関しては全く語られていない。

それ以後五位については、第五代の峨山紹碩禅師（一二七五—一三六五）に『山雲海月』三卷があり、功勳五位の説明も屢々みられる。中でもその中枢を述べているのは次の句である。

君者^ト。心性本分^ト時。曾不^レ露^レ本位^ノ之主^ト也。最初未分^ノ主^ト。又窮極^ノ的^ト当^レ主^ト也。始^ニ之^ニ始^ト。末^ニ之^ニ末^ト。収^ニ君^ノ一^ノ字^ト。是^レ第^一正^ノ位

也。……如^レ此^レ初中後全徹底之一物也。……則向奉功共
 功^ヲ功^ヲ究^ル竟^ス窮^ス極^ス位^也也。

結局、君正位の一色が功勲五位の根本であり究極だとするもので、しかもそれは「人人之自性。本来之靈氣」だとしているから済門的正位・理偏重的傾向が明確である。又向上人は一切言説に亘らぬと強調するのみ等、傍提的性格は忘れられているのが知られる。しかし君・正位一色に自ら向下を兼ねていると説き、余り無的強調をせぬ等、大慧とは異なる綿密な面もある。

次に功勲五位をのべているのに大智祖継禪師(一二九〇—一三六六)があり『天童小參抄点破』にそれがみられる。それによれば向とは自己有ることを知って退歩^{シテ}就^シ己^ニをいい、奉とは断絶なく君に奉するをいい、功とは無功用をいうとし、共功とは王子誕生であり、通身体に合し得た所とし、功は異中異、主中主で塵劫以前の大事であるとしているのを見ると、傍提に近い説明もあるが、多分に済家に近いものである。結局峨山と余り変らないのではないかと思われる。

その他通幻寂靈禪師(一三二二—一三九一)や実峰良秀禪師(一一四〇—五)に五位説の唱道があったことが知られているが功勲五位には余りふれず、然も偏正においては兼中至を用いている等、恐らくは峨山と変らぬと思われる。

これ以後擽撫藁を除いて江戸時代迄は功勲五位について述

べたものはない。が江戸時代になると中国明代の洞上古轍の伝来に刺激され、又宗乗復古の氣運に乗じて種々の功勲五位説解釈が現われた。即ち万松黙隱祖价和尚の『曹洞宗五位鈔或問』(一六八〇年筆記)から、指月慧印禪師の『未正語』(一七三三年刊)『不能語五位説』(一七六一年跋)、その他『洞上古轍』の註釈書として、太白克醉「洞上古轍口弁」(一六八三年頃発案刊行)、一線万回述春耕録「洞上古轍鐘甕聞解」(一七五〇年頃写)、釈玉線註「洞上古轍字義(或鈔)」(年代不詳)があり、それ等が結局洞水月湛禪師により功勲五位傍提へと大成されていったのであるが、頁数の都合上簡略乍ら、これを少しみてみよう。

江戸時代で、最初に正統的偏中至説を唱えたのは黙隱祖价禪師でその功は筆紙に尽くし難い。しかし自身では古轍の非をならし、耕雲種月の勝れていることをのべているにも拘らず、功勲五位では余りその影響が明確でないのは如何なる理由であろうか。

即ち向を一念回向返照だとするのはよいが、入觀趣向の向時も、出觀蘇息の背時も趣向の念を忘れてはならぬとし、坐禪觀法中心的説明をしているのは独特であるけれ共傍提や擽撫の説に比すれば当を得ていぬというべきであろうし、本心が万法を照らす時、法として帰せざるを得ないともいう所にその心・理中心的性格がみられる。奉については功成り見道

して、六塵を擯却して無眼耳鼻舌身意の本心を得るのが此の位であるとし、功については趣向の後、觀行の鋤を以て妄想の草を除き、段々に上達して功作を忘れるのであるが、その時でも勤めることを忘れてはならぬとし、共功では見道し正位に入った後に異類に入って功を修することとしている。又功々は正中偏の偏中至から正位に入るもので、それは智不到処であつて、雪の純一無雜絶点の義にたとえられる大功一色無我無人の地としている。

是の如く迷悟相對に觀て正位の無の徹底を求めるところ擧撫の影響は全くみられず、傍提からも遙かに遠いものがある。といつて大慧古轍と一連かというに必ずしもそうではなく、大慧古轍が向上事に比すれば捨つべきものとしている、語句葛藤の綿密相即を認めている所は異なる。

次に指月禪師であるが、禪師には不能語五位説と未正語の二著あるも趣は同じなので一つにしてみてゆく。まず向について是有ることを知つて奉重することとするが、有ることとは無象周遍の法身であり、この位ではその法身の功德に向うが忘れるところまでは到り得ぬとし、理重視と段階的性格をだしている。奉については偏中において日夜綿密なること、通身紅爛なるべきことといつて偏位の徹底をのべているのは素晴らしい。功では初めて那人をみて皮膚脱落して随処卓然たり、正位一色ですべて吾戲具となり十方虚空の築著磕著だと

いう。これは濟門の無用一辺とは異なり、又傍提の段階的就體説でもないが、さりとて擧撫の回互強調よりは正位一色の強調のかけているものである。以上のことは畢竟何によるかといえ、指月禪師が功勲五位を解するに偏正五位をもつてその基盤とし本証的性格をだしたということなのだと思う。然し功勲の独自の宗乘性までは至らなかつたのであらう。即ち次の共功は法住法位とし、一々皆真、一々皆妄、染淨を分たず一切平定だとし、功功を功の極も混び功不功をみぬ無功に至つた位だとし、この一切の空劫を以て常に向奉等に入れば究竟して成不成もないといつている。これは功勲五位が進修の階梯なるを忘れて、偏正五位の第五位の兼中到中心説によつたものに外なるまい。

かくして功位で無用の自在を得、共功で諸法現われ、功々で空劫に帰すとするのは、傍提よりは或意味で濟門的色彩が強いといえる。結局これはなにに基づくかといえ、或問についていえることであるが、始めの向位から師の働きかけを認めず、傍提の宗旨を考慮せずに功勲五位を考えようとしたことによるのではなからうか。

そしてこのことが大きく自覚され訂正され真義が発揚されてきたのが、洞水禪師の功勲五位傍提であるといえよう。しかしこの五位傍提も翻つて擧撫と比較するに甚だ不徹底なものにしか過ぎぬことは第二項で詳説した通りであり、擧撫

藁の、同時代はおろか、現今までも比類を絶して卓越した宗乘眼には驚歎せざるを得ないのである。

これについて太白克酔や一線万回等の洞上古轍の註釈者達が古轍の済下的見解をそのまま抱いてそれを現今にも伝えていることをみると、擽撫藁の偉大さが改めて知らされると思う。

2 中国曹洞禅における淵源について

(洞山・曹山・石霜)

以上日本曹洞禅における功勳五位の発揚をみたが、ここにそれはあくまでも全一の仏法を唱える日本曹洞禅においてのもので、発祥地の中国曹洞禅では更に異なるのではないかとの疑問が起ろう。事実洞山の法従弟で洞山の宗旨を宣揚したといわれる石霜慶諸禅師(八〇七—八八八)や、洞山の弟子で曹洞宣揚に最も貢献したといわれる曹山本寂大師においては、擽撫藁よりも或意味では五位傍提のような段階的性格が多少共みてとれるのである。五位傍提の段階的解釈も二師の語を借りての説明が多いのをみれば猶更であろう。よって次にこれを考えたい。

石霜禅師は洞山の功勳五位に和して王子五位を唱えたといわれるが、その王子五位の要は誕生王子にあり、その基づく所は「休し去り、歇し去り、冷湫々地にし去り、一念万年にし去り、寒灰枯木にし去り、古廟香炉にし去り、一条白練に

し去る」という七去の実践に重点があり、それは又当時の弊風批判に基づく「吾宗兼要三親到一回」の体得の強調によることが知られている。がその休歇親到の主張も、本師道吾禅師の忌日に齋を設けず、無三寸を以て供養する故、というに到ると方便段階的理事隔別の傾向が指摘されよう。

又曹山大師においてみると、その五位頭訣の揀や、偏正五位に和した君臣五位には段階的な所は全く見当らない。が曹山には修行者の具体的な実践の道標で功勳五位に代るものと見られるものに三墮と四種異類^⑩があるのでこれをみよう。

三墮とは沙門墮・尊貴墮・墮類墮で、沙門墮は超聖の披毛戴角行をなすこと、尊貴墮は本分の法身法性にもとらわれぬことで問題ないが、重要なのは随類墮の説明である。随類の類とは異類であり、そこに自在を得ることをいうのであるが、それを「随類墮者。為^ニ初心知^ル有^ニ自己本分事。廻向之時擯^ニ出色声香味触法。得^ニ寧謐。則成^ニ功勳。後卻不^レ執^ニ六塵。墮^ニ而不^レ味。任^ニ之無礙。」^⑪こゝで声色を擯出して無正位なる寧謐の現成を以て功勳の達成とみ、その後六塵において自在を得るといふ見方は重要である。

又四種異類とは往来異類、菩薩同異類、沙門異類、宗門中異類であるが、往来異類とは一切の声色、天堂地獄餓鬼畜生修羅の一般世界である。菩薩同異類とはまず自己を明らかにしかる後に卻って生死異類に入つて利他を先として撰するこ

とであり、大乘の願行を表わし、沙門異類とは本分の事あるを知り終つて一切の善悪を忘じ仏位に叶うも、その報位に入らず披毛戴角の異類中行をなすのであり、宗門中異類とは、一切の道著は無用で、直に異類中に向つて異類中事を行道取することとするのであるが、この功勲の要たるべき第三の沙門異類の説明は五位傍提の功勲觀に密接な關係がある。

謂。先知^レ有^ニ本分事^一了。喪^ニ盡^ニ今時^一一切^ノ凡聖因果功行^一。始^メ得^ニ就体一般^一。名^ニ為^ニ獨立底人^一。亦名^ニ沙門稱断事^一。始^メ得^ニ表裏情忘^一。三世事^一盡。得^レ無^ニ遺漏^一。得^レ名^ニ仏辺事^一。亦云^ニ一手指^ニ天地^一。亦云^ニ具^ニ大沙門^一。轉^ニ卻沙門稱断事^一。不^レ入^ニ諸聖報位^一。始^メ得^ニ三名^一。為^ニ沙門行^一。亦云^ニ沙門轉身^一。亦云^ニ披毛戴角^一。

右の棒線部分はそのまま五位傍提の体用区別の段階的見方に応用されているのであり、又江戸期の殆んどの功勲五位唱道者の用いているものである。しかしその休歇は直ちに仏辺事としてゐる如く、日本功勲五位解釈者の其とは異なり、段階と解してはならぬものであろう。同様に石霜の王子五位も単に他宗の見地明白の休歇をこえた徹底したものと思われる。これを我々は洞山自身に確かめねばならない。

洞山大師には機用としてあるのは偏正・功勲兩五位の他には三路・三滲漏が伝わっている。三路とは鳥道の没蹤跡、玄路の一色、展手の方便から成立ち、恰かも石霜や曹山の段階

的見方の原型とも受取れる。

師示^レ衆曰、我有^ニ三路^一。按^レ人、鳥道・玄路・展手^ノ。僧問、師尋常教^ニ学人^一。行^ニ鳥道^一。未審如何。是鳥道。師曰、不^レ逢^ニ一人^一。云、如何行。師曰、直須^ニ足下無絲去^一。云、祇如^レ行^ニ鳥道^一。莫^ニ便是本来面目^一。否。師曰、闍黎因^レ甚顛倒。云、甚麼處是学人顛倒。師曰、若不^ニ顛倒^一。因^ニ甚麼^一。卻認^レ奴作^レ郎。云、如何。是本来面目。師曰、不^レ行^ニ鳥道^一。

これをみると鳥道とはあくまでも本来面目としての玄路の前段階で隔別のようであるが次の如き語もある。

虚言不^レ犯、回互傍參、寄^ニ鳥道^一而寥空、以^ニ玄路^一而該括、然雖^ニ空体寂然^一、不^レ乖^ニ群動^一、於^ニ有句中無句^一、妙在^ニ体前^一、以^ニ無語中有語^一、迴途亦妙、……無影樹下、永劫清涼、觸目荒林、論^ニ年放曠^一、举足下足、鳥道不^レ殊、坐臥経行、莫^レ非^ニ玄路^一、(玄中銘序並頌)

してみれば三路は明らかに隔別ではない。因みに三滲漏についていえば、見滲漏・情滲漏・語滲漏であり、これは正・偏・兼帯における誤りを訂すべきもので功勲ではない。

即ち洞山には法を隔別に分つてみる傾向は余りない。結局その法を、末代乾慧の機根を意識して普衍しようとした、石霜・曹山において漸く分析的に現れてきたのを、傑堂・南英以外の祖師達が済下の見地明白と混同して洞山の本意と思つたのではなからうか。断定はできないが、もし然りとすれば

擽撫藁は石霜・曹山を超えて直に洞山に繋ることになる。

擽撫藁も下巻に曹山の三種墮四種異類の解釈をしているが、体用差別、段階的説明をできるだけ一如に近づけて解釈しようとする傾向がある⁽²⁾のであるが、その本義の復古を願ったからのことと思われる。

- 1 僧堂用講本『海雲山月』巻中186頁。
- 2 同右258頁。
- 3 同右191頁その他随所にあり。
- 4 天童小參抄点破二三丁左、此書は岸沢文庫にしかない。幸い『元字脚葛藤集』転載されているので参照させて戴いた。駒大図書館蔵の『天童小參抄大智和尚解註』とは非常に異なる。
- 5 『日本禅籍史論』168～170頁。
- 6 曹全書註解五441頁。祖价和尚には「曹洞五位抄」もある。
- 7 同右459頁。
- 8 同右469頁。
- 9 宗学研究第十号拙論78頁参照。
- 10 曹全書註解五36頁以下。
- 11 国訳禅学大成洞山悟本大師語録7頁。
- 12 たとえば宗門異類の就体一般の体を自受用他受用俱備の盧遮那仏とし特に体用隔別をさけている。

四 おわりに

以上で擽撫藁の復古の模様を探ってみたが、ここでその特

異な復古が行なわれた所以を考え、我々の今後の参究の指針ともしたいと思う。

これにはまず江戸時代で卓絶した解釈をなした洞水和尚の歴史的背景を考えてみたい。然すると和尚以前の江戸初期から中期へかけての万安・独菴・月舟・梅峯・卍山・天桂といわれる和尚達の説には見性悟道の説が多く見られる。これは戦乱期に宗乗が昧没して、済宗宗義との混淆の結果の悪影響と思われるのであるが、この頃に功勳五位が宗乘的に解される筈がなかったのは当然である。黙隠祖价が偏正五位で、正統的配列を示したのみで、大変な功績と考えられる程の時代であったと思われる。それにしても黙隠は当時流布していた頭訣に明瞭に宗義的主張があったのを見つゝ、未だ多分に無理解の所があるから宗義理解の困難さがしれるのである。

この宗義混乱期を超えて、宗乘的に本証妙修として只管打坐仏威儀の実践を以て説かれるようになったのは、面山瑞方（一六八三—一七六九）、万仞道坦（一六九八—一七七五）以降である。結局十七世紀に入って続々と出版頒布され始めた高祖の著作や宗義書が根を降ろして理解されるにはそれだけの日時が要したわけである。しかもそれにはまずそこで直接接触されている面授・禅戒・清規等の本証的儀式面がまず理解され、次にその内容の宗義面が理解されていったものと思われる⁽¹⁾。結局高祖からも触れられていなかった五位、特

に中国日本を通じて余り問題にのぼらなかつた功勳五位に関しては、一応の復活ですら、十八世紀の末の洞水和尚の出現を待つ以外になかつたものと思われる。

ではこれが攘撫藁の場合は如何という、この場合は五位傍提の如き宗乗の自覚の段階的進展上ではなくて、むしろ義价・瑩山・峨山・大智等宗義的には漸衰の傾向にあって、突如偉大な自覚復古が行なわれた関係にあつたようである。

即ち、峨山が臨済的解釈との混淆を抱きながら、それを是としていたのに対し、

若欲^シ識^レ曹洞宗旨^ヲ一者。須^ニ曹洞宗派下尊宿之説^ヲ是為^レ正也。
不^レ可^レ干^ニ他家宗匠作家之事^ニ矣。自家頻^リ弘^ニ門前雪^ノ。莫^レ管^ニ他人屋上雪^ノ。

といっているのは、単に一般にいわれる如き宗我見に基づく偏狭な態度ではなく、宗旨の差よりくる如何とも埋め難い性格の差を、時弊に対し特に強調したものである。事実正法眼蔵の主張、そこにおける臨済禅への批判をよく噛みしめればかみしめる程そうならざるを得ないのである。かかる自覚は当時まだ埋れていず、諸人の関心もあつた、眼蔵による以外には考えられない。如何に傑堂・南英の宗旨への開眼ぶりが凄じかつたかが知れる素晴らしいことばだと思ふ。結局眼蔵が如何に曹洞宗旨を深くえぐつたものであるかに感嘆せしめられるに尽きるのである。ただし眼蔵一点ばりであると現代

の如くその卓絶性と宛転性に目を奪われて、哲学的本証強調に陥り易いので、五位思想の、特に実践的な傍提宗旨の強調のある功勳五位の参究も重要であると思われる。

以上攘撫藁の自覚の背景を五位傍提と比較して考え、その基盤を眼蔵に求めたのであるが、これには両師の歴史的社会的背景を更に詳細にし洞山の功勳五位の生みだされた歴史社会的背景やら、又この功勳五位の学説としての石霜の王子五位やその背景との厳密な比較、更には曹山以後清代の五位解釈まで仔細に調べ中国的特質も明らかにして攘撫藁の功績特質を一層明確にすべきであるが、それは今後の課題としておきたい。

1 「印仏研究」第十五卷第二号拙論「江戸期における曹洞禅の自覚」参照。

2 曹全書注解五「偏正五位図説詰難」251頁。

3 日本禅籍史論205頁。

4 応永廿六年（一四一九）に眼蔵編纂史上貴重な梵清本八十四巻が浄写されていることを忘れてはならない。なお傑堂南英が眼蔵を拝覧していることは重離疊變訣で仏道巻の人天眼目批難の語を援用している所にもしれよう。